

— 産業界と学術・研究機関を結ぶ —

News
Letter

2025年5月
Vol. 12

かけはし

特 別 対 談



関西健康・医療学術連絡会 理事長

橋本 信夫



シスメックス株式会社 代表取締役会長 グループCEO

家次 恒

これからのAI時代をしなやかに生きる

シスメックス株式会社は神戸市に本社を置き、血液検査や尿検査の装置などで世界トップクラスのシェアを誇る医療機器メーカーである。今回の「かけはし」特別対談では、同社をグローバル企業に成長させた家次恒・代表取締役会長グループCEOと、関西健康・医療学術連絡会の橋本信夫理事長が、デジタル技術やAI(人工知能)によって急速に変化する現代社会のあり方について議論を交わした。

● これまでになく速い社会の変化

橋本／近年は、デジタル技術やグローバル化の加速に加え、AIの急速な普及によって社会が大きく変化しつつあり、医療産業も例外ではありません。本日は、これから私たちはどこへ向かうのか、ぜひお話を伺いたいと思います。

家次／とにかく、あらゆる面で変化のスピードが速くなっていますね。かつてのアナログ時代では、さまざまな積み重ねによってものが進み、そのプロセスが経験となりました。図書館で調べものをしたりして時間はかかりましたが、納得して得た知識が頭に入ったものです。一方、今はAIが何でもすぐ答えてくれますが、あまり記憶に残らない。次にその知識が必要になれば、また調べればよい。社会全体のスピード感が大幅に加速しています。便利な時代になりましたが、AIが常に正しいとは限りませんし、頭のなかに情報が蓄積されにくいのではないのでしょうか。



橋本／最近では、学会発表を行った若い医師がエビデンスを質問されて、「Googleで調べました」と答えたなどという笑い話もありますね。医学研究でも、オリジナルの論文をしっかりと読み込んでいないなど、きちんと根拠を調べないケースが散見されます。例えば、誰もが知っているダーウィンの進化論にしても、原著の文献を読んでもと有名なガラパゴス諸島について実はわずかしが触れていないなど、一般的なイメージと異なることがけっこうあるのです。

Profile

関西健康・医療学術連絡会 理事長
橋本 信夫（はしもと・のぶお）
地方独立行政法人神戸市民病院機構理事長。1973年京都大学医学部卒業。京都大学大学院医学研究科教授、国立循環器病センター総長、国立循環器病研究センター理事長などを歴任し、2017年4月より現職。医学博士。専門は脳神経外科。

家次／なににごとも本当かどうか疑って裏を取るという作業を回避する傾向がありますね。思考や経験の積み重ねではなく結果だけを問うという世相で、たしかに便利にはなりましたが、そこからオリジナルなものは生まれるのでしょうか。大切なことは、自分はどう思うか、どうしたいのか、しっかり考える習慣だと思います。

橋本／AI時代になって、すぐ何でも答えは出るけれど、逆にオリジナルなものが生まれにくくなっているとしたら、少し不安ですね。

● グローバル企業を育て上げた視点

橋本／家次さんは銀行員として約13年間を過ごし、それから昭和61年に医療機器メーカーの東亜医用電子株式会社（現シスメックス株式会社）の取締役へ転身されました。全く違う世界へ入って、どのようなことを考えられたのですか。

家次／当初は銀行で営業を担当していましたが、縁あってこの会社へ来ることになりました。まだ当時は地元の中小企業で、私は銀行員としてこれからという時期だったので、周囲からは異論もありましたが、「やるしかない」と覚悟を決めました。

橋本／私は若い頃、大学の事情で脳下垂体を研究することになったのですが、それはあまり有望とも思えず気が進みませんでした。しかし、始めてみるといろいろ手つかずの課題があり、だんだん面白くなった経験があります。興味が薄かったことでも、向き合ってみるとものごとを違う目で見えるチャンスになりますね。

家次／そうですね。まだそのころの私たちは、ただアメリカの医療機器業界を追いかけている状態で、いかにキャッチアップするかということで精一杯でした。しかし、それだけではいけない、先行する相手を追いつけながら、何か自分たちの強みを生かして追い越すことを目指したのです。医療機器の市場規模は人口に比例しますから、検査数が増えていく中国やインドなどへマーケットを広げることも重要です。そのために、追いつけながら、新しい市場はどこにあるか、それを拓くためにどうするのか、といったことを考え、それまでの会社のカルチャーを変える必要もありました。

橋本／とりあえず優れたものを真似ることは大事ですが、それだけで終わってしまうのではなく、同時進行で何か違うこともやろうという発想ですね。

家次／はい。では、私たちの強みとは何なのか。実際に医療機器を使う顧客の身になって、どんなことで困っているか、何か改善できることはないか。そこで考えたのは、ラボの自動化によって効率化と安全性の両方を実現することです。当時、血液検査の多くは手作業で行われており、検査技師が容器を開くときに検体に触れるおそれがあるなど、安全性に問題がありました。一方、すでに日本には優れたオートメーションの技術があったので、それを生かせると思ったのです。これはかなりうまくいって、海外でも高い評価を受けました。今では血液検査は自動で行うことが当たり前になっています。検査結果の正確さという大前提を守りつつ、本家と異なるやり方で自らの強みを見出すことができました。その違いが競争力になるのです。

橋本／医学・医療の世界でも、国や文化によって考え方が異なり、それぞれ強みとするところも違いますね。例えばインドの病院では、どんどん患者が運ばれてきて毎日たくさんのオペをやらなければならない。とにかく、できるだけ速く数をこなして、いかに少しでも多くの患者を助けるか、という世界です。また、アメリカなどの大規模な病院では手術のスケジュール



Profile

シスメックス株式会社
代表取締役会長 グループCEO
家次 恒 (いえつぐ・ひさし)

1973年、京都大学経済学部卒業、株式会社三和銀行入行。1986年、東亜医用電子株式会社入社、取締役。常務取締役などを経て、1996年に代表取締役社長。2023年より現職。2016～22年、神戸商工会議所会頭。2022年、旭日重光章。

※1. Scoville Prize

新たな手術法を考案するなど優れた脳神経外科医として知られるアメリカのWilliam Beecher Scoville氏(1906-1984)にちなんで1993年に創設された賞で、脳神経外科分野の発展に対する多大な貢献を表彰して世界脳神経外科学会連合(WFNS)によって4年に1人が選ばれる。橋本信夫理事長は2005年に受賞、現在まで唯一人の日本人受賞者である。

※2. 中谷財団

シスメックスの前身である東亜医用電子の創業者であった故中谷太郎氏が、医療機器の研究開発支援などを目的として、1984年に設立した財団。2008年から医工計測技術の研究開発における優れた業績に対して「中谷賞」を授与している。2024年にはBME(Bio Medical Engineering)分野を対象として新たに「神戸賞」を創設した。

がぎっしり詰まっており、時間が来れば十分な状態でなくとも終了して次へ行かなければならない。一方、日本では、一人ひとりの患者さんと丁寧に向き合って、時間をかけて最善を尽くすことを目指すのが強みです。私は2005年に世界脳神経外科学会連合からScoville Prize※¹という賞をいただいたのですが、これは世界で4年に1人だけ表彰されるものです。手術数ではアメリカの大病院などに到底かなわないのに受賞できたということは、患者さん一人ひとりを大切にするという日本のクオリティが評価されたのではないかと思います。

常に自分の頭で考え抜く習慣を

橋本／シスメックスがグローバル企業として成長できた理由が少し見えてきたような気がします。現代社会では、さまざまな情報が容易く手に入りますが、そこで大切なのは、自分ははどう思うのか、何をしたいのか、自分の頭で考えることですね。

家次／現代のデジタル社会では、モニター画面と向き合うことばかり多くなる一方、リアルな体験の機会がどんどん少なくなっているように思います。これは教育の領域でも同じでしょう。誰かとインターネットでつながるのと、実際に会って握手するのでは、大きな違いがあります。そもそも人と会って話をするのは楽しいことですし、この人は何を考えているのだろうと想像したりするのも面白い。そういった場面が少なくなっていくとしたら、ちょっと残念に思います。

橋本／その通りですね。今もこうやって直接お話をさせていただき、もちろん目的があってお会いしているのですが、それ以外にもいろんな刺激を受けたり、話が横道にそれたりして、プラスアルファで得られるものがたくさんあります。最近はオンラインの会議が増えていますが、ある程度の情報を共有することはできても、雰囲気やニュアンスといった部分はほとんど伝わらないのではないかと思います。

家次／私たちの大学時代などは、いろいろな学部の友人たちと議論したり酒を酌み交わしたりしたものでした。今の若い人たちは、そういった機会が多くないかもしれません。実は、中谷財団※²として神戸賞や中谷賞を創設したのは、そういった視点もあります。もともと地元の会社ですから神戸に愛着がありますし、若い研究者たちを勇気づけたい、サポートしたいというのが賞の主な目的ですが、その授賞式やパーティなどが多くの人々と出会ったり交流したりする場になるだろうという思いもあるのです。

橋本／なるほど、それは素晴らしいことだと思います。



す。日本の科学研究はレベルが高く、まだまだ優れた若手もたくさんいます。そういった若い人たちが、受賞を励みにしてますます頑張ってくれることを、ぜひ期待したいと思います。

家次／もともと日本人は、先行する事例の真似をするだけでなく、そこから自らの考えを生かして応用することが得意です。その強みを受け継ぐには、教育も重要でしょう。今の時代は変化が速く、じっくり頭を使う時間が少ないという難しさもありますが、とにかく自分で考える習慣を身につけることが大切だと思います。

私たちが向き合うべき課題

橋本／現代の日本では、どんどん高齢化が進む一方、医療に使えるヒトやカネには限りがあります。これは私たちが抱える大きな課題です。言いにくいことですが、どの患者さんにどれだけの資源を投入するか、全体として考える必要があります。例えば、いわゆるターミナル・ケア※3、終末期の医療に大変なコストがかかっている。これは医療の現場で解決できる話ではなく、国民的なコンセンサスが求められています。

家次／そこで考えなければならないのは、どのような医療が患者さんにとって幸せなのかということです。意識がない状態で、際限なくコストがかかり、家族にも負担となるような終末医療を、多くの患者さんたちが本当に望むのでしょうか。

橋本／元気なうちに自分の意思を示しておくことを推奨する仕組みがあり、神戸市でも啓発に取り組んでいますが、なかなか広がらないというのが現実です。

家次／アメリカなどでは医療費が大変な高額になり、経済的な格差によって受けられる医療にも違いが出ています。日本にとっても他人事ではなく、現在のやり方をずっと続けるのは

難しいかもしれません。どのようにバランスを取るべきなのか、私たち自身が真剣に向き合って、自分の頭で考えなければならないテーマのひとつです。このような問題は、AIが解決してくれるものではありません。

橋本／以前から、家次さんのお話を一度じっくり伺いたいと思っていましたが、本日は素晴らしい時間をいただきました。これからの時代をどう生きるか、たくさんのヒントが詰まっていたのではないかと思います。ありがとうございました。

家次／こちらこそ、貴重な機会をいただき、ありがとうございました。シスメックスは、これからも神戸の企業として世界の医療に貢献して参りたいと思います。
(2025年3月10日、神戸市中央区のシスメックス本社にて)

※3. ターミナル・ケア

高齢者などを対象とする終末期の医療では近年、どのような医療を受けたいかをあらかじめ家族や医療者らと話し合っておく「アドバンス・ケア・プランニング(ACP)」が推奨されている。神戸市でも、2019年に設置した「人生の最終段階における意思決定支援に関する有識者会議」での議論をもとに、ACPの普及に取り組んでいる。



人口減少社会を 希望 に

人口の減少が急激に進むなか、2050年には日本人の総数が1億人を下回る見通しとなっており、未来に不安を抱く人々も少なくない。世界的に見ても、20世紀の人口激増時代から21世紀の定常化時代に推移すると考えられており、次なる社会のモデルが求められているといえる。そこで、関西健康・医療創生会議では今年1月、人口減少という課題を悲観的な側面からとらえるのではなく、中長期的な視点に立って新たな可能性を模索するため、「人口減少社会を希望に」をテーマとするシンポジウムを開催した。「成長社会」から「成熟社会」への移行を前提に、希望を持ってこれからの時代に向き合う道筋を探ろうと、幅広い議論が交わされた。

人口減少の時代こそ文化的な多様性を

今回のシンポジウムは、オンライン中継を行わずリアル会場のみで実施。グランキューブ大阪（大阪府立国際会議場）の12階特別会議場で、多くの来場者が熱心に耳を傾けた。プログラムの冒頭、シンポジウムを後援した関西経済連合会の牧村実科学技術・産業振興委員長があいさつを行い、「人口減少という課題を希望に変えるため、これまでの考えにとらわれず、新たな社会のモデルを世界へ提示したい」と述べた。

続いて、総合地球環境学研究所の山極壽一所長が「エコロジカル視点から40年後の関西を考える」と題して特別講演を行った。人工知能（AI）が急速に普及する現代社会では、むしろデジタル化できない人間の身体や意識、直感などが問われると指摘。多くの人々が同じ方向を向きがちなSNS時代でこそ文化的な多様性が重要になるとしたうえで、「そのために人口減少社会はむしろ都合が良い」と述べた。さらに、都市化やグローバル化ではなく、「人間の共感力が生きるとは小さな地域と地域のつながりが大切だ」と強調した。



総合地球環境学研究所
山極壽一 所長

東京一極集中ではなく分散した多極へ



京都大学 人と社会の未来研究院副院長
広井良典 教授

次に、京都大学人と社会の未来研究院副院長の広井良典教授が、「人口減少社会のデザイン」をテーマに基調講演。人口減少時代には多くの難題が待ちかまえているが、この危機をチャンスとしてとらえ、これまでの延長ではない逆転の発想が必要だと述べた。そのうえで、近年は若い世代で「ローカル」や「地元」への関心が高まっていることなどに言及し、そうした若者への支援を充実させるよう訴えた。

また、持続可能な社会のあり方をシミュレーションした研究で、一極集中ではなく分散した多極が望ましいとの分析結果が出たことを紹介。時代のキーワードとして、かつての「工業」「エネルギー」から現在は「情報」へ、そして今後はデジタル化を越えて「生命」に重点が移ると指摘。時代の流れが変わる転換点において、人口減少のフロントランナーである日本には大きな役割があると強調した。

基調講演の2人目として、関西広域連合長を務める三日月大造滋賀県知事が「人口減少社会の諸相と広域連携の重要性」をテーマとしてオンラインで登壇。これから人口の減



関西広域連合長
三日月大造 滋賀県知事

少は避けられないとして、それを乗り越えるためには医療やインフラなどを中心に地域間の連携がカギになると述べた。一方、人口減少の進展によって、かつて人口増加に伴って失ったものを取り戻す時代が来るとの展望を提示。教育や居住空間などを例に挙げ、新しい考え方で行政運営を進めたいとの考えを示した。

また、日本の歴史を築いた二府六県四政令市が連携する関西広域連合の立場から、東京一極集中とは異なるローカリゼーション社会の構築を提唱。その契機として2025大阪・関西万博を挙げたほか、ポスト情報化時代へ向けて行政機関と若者たちが対話するなど滋賀県として具体的に進めている取り組みを紹介した。

若い世代で高まるローカル回帰の志向

プログラムの最後に、「人口減少をチャンスに変えるには」と題してパネルディスカッションを実施。山極氏、広井氏、三日月氏の3人がパネリストとして参加した。山極氏は、「すべてが東京を向いている首都圏と異なり、関西には幅広い多様性があるので、それが強みになるのではないかと提案。三日月氏は「関西には個性的なところが多いので、まとめるのは実際なかなか大変だが、たとえ意見が一致しくとも普段から活発にコミュニケーションするよう心がけている」と応じた。

広井氏は、「インバウンド全盛の昨今、外国人の目を通じ

て日本の良いところを再発見することもある。関西でも地域の文化などが注目されている」と指摘。山極氏は「文化とは、国や府県などの大きな規模ではなく、町や村といった小さな単位に存在する。それがうまくつながって交わることが大切だ」と述べた。

また、大学で教鞭を執っている広井氏は「若い世代でローカル志向や社会貢献意識が高まっていることに希望を感じている」と指摘。三日月氏は「社会に目を向ける若者が増えるのは素晴らしい。そのカギは“本気の対話”ではないか」と述べた。山極氏も「ぜひ若い人たちの発想で地域の活性化を進めてほしい」と訴えた。

シンポジウムの締めくくりとして、関西健康・医療創生会議の井村裕夫議長があいさつ。「これからの課題にオール関西で立ち向かっていくため、素晴らしい議論ができた。ぜひ次世代の人たちの活躍に期待したい」と講評を述べた。



グランキューブ大阪(大阪府立国際会議場)12階特別会議場

関西健康・医療創生会議シンポジウム 「人口減少社会を希望に」

主催 関西健康・医療創生会議
NPO法人「関西健康・医療学術連絡会」
共催 関西広域連合
バイオコミュニティ関西
後援 関西経済連合会
関西経済同友会
関西医薬品協会
日時 2025年1月22日(水) 16:00~18:00
会場 大阪府立国際会議場(グランキューブ大阪)

PROGRAM

- 開会挨拶 …… 牧村実／関西経済連合会 科学技術・産業振興委員長
- 特別講演 …… 山極壽一／総合地球環境学研究所長 前京都大学総長
「エコロジカル視点から40年後の関西を考える」
- 基調講演 …… 広井良典／京都大学人と社会の未来研究院 副院長 教授
「人口減少社会のデザイン」
三日月大造／関西広域連合長 滋賀県知事
「人口減少社会の諸相と広域連携の重要性」
- パネルディスカッション ……
山極壽一／広井良典／三日月大造
「人口減少をチャンスに変えるには」
- 閉会の辞 …… 井村裕夫／関西健康・医療創生会議議長 元京都大学総長

NPO法人

「関西健康・医療学術連絡会」の活動をご支援ください

▶ 賛助会員ご入会のお願い

NPO法人「関西健康・医療学術連絡会」は、関西健康・医療創生会議の目的を達成すべく、学術・研究機関と産業界をつなぐ「かけはし」として、2016年2月に発足しました。学術連絡会は、創生会議を構成する大学および研究機関との連絡調整、ならびに創生会議の展開する諸事業の実施・運営を担います。

しかしながら、学術連絡会の活動は、賛助会員とご参画いただいている企業・団体のみなさまの会費とボランティアによって支えられています。学術連絡会ひいては創生会議の活動は、健康長寿社会を達成できる「新たな産業の創造」と、安心して健康に暮らせる「持続可能性のあるまちづくり」に寄与することをご理解いただき、さらなるご支援をくださいますようお願い申し上げます。

●会費／年額一口 100,000円

※入会の申し込み方法など、詳しくは
学術連絡会ホームページ

<http://www.khma.jp/>

をご覧ください。

▶ 賛助会員のご紹介

創生会議の趣旨に賛同し、賛助会員として、創生会議ならびに学術連絡会の活動をご支援くださっている団体・企業のみなさまをご紹介します。

(2025年3月31日現在、五十音順)

- 小野薬品工業株式会社
- 川崎重工業株式会社
- 関西医薬品協会
- 関西経済連合会
- JCRファーマ株式会社
- 塩野義製薬株式会社
- シスメックス株式会社
- 株式会社島津製作所
- 武田薬品工業株式会社
- 田辺三菱製薬株式会社
- 日本新薬株式会社
- ネクセラファーマジャパン株式会社
- 阪急電鉄株式会社

▶ 役員一覧

理事長	橋本 信夫	神戸市民病院機構 理事長
理事	湊 長博	京都大学 総長
	金田 安史	大阪大学大学院 特任教授
	藤澤 正人	神戸大学 学長
	上本 伸二	滋賀医科大学 学長
	原田 省	鳥取大学 学長
	松本 俊夫	徳島大学 名誉教授 藤井節郎記念医科学センター顧問
	塩崎 一裕	奈良先端科学技術大学院大学 学長
	夜久 均	京都府立医科大学 学長
	鶴田 大輔	大阪公立大学 医学研究科長兼医学部長
	細井 裕司	奈良県立医科大学 理事長・学長
	川股 知之	和歌山県立医科大学 医学部長
	松村 到	近畿大学 学長・医学部長
	佐野 浩一	大阪医科薬科大学 学長
	木梨 達雄	関西医科大学 学長
	野口 光一	兵庫医科大学 副理事長
	竹村 彰通	滋賀大学 学長
	高坂 誠	兵庫県立大学 学長
	大津 欣也	国立循環器病研究センター 理事長
	松岡 聡	理化学研究所 計算科学研究センター センター長
	谷藤 道久	田辺三菱製薬株式会社 医療政策・マーケットアクセス管掌
	手代木 功	塩野義製薬株式会社 代表取締役会長兼社長 CEO
	服部 重彦	株式会社島津製作所 相談役
	家次 恒	シスメックス株式会社 代表取締役会長 グループ CEO
監事	土屋 裕弘	元田辺三菱製薬株式会社 会長
事務局長	中村 泰三	
事務局次長	落合 正晴	
事務局	藤野 恵	田畑 睦美

(2025年4月1日現在／敬称略・順不同)

編集後記

今号では、関西を代表するグローバル企業、シスメックス株式会社の家次会長と橋本理事長の対談が実現しました。和やかな中にも議論的、情報がたやすく手に入る時代だからこそ、自分の頭で考えることが一層大切、との貴重なメッセージをいただきました。

またこれからの人口減少社会を展望するシンポジウムでは、官学を代表する論者の皆さんから近未来の日本のあるべき姿が語られました。

いずれもこれからの創生会議、学術連絡会の活動指針として大切にしてまいりたいと思います。(M)

関西健康・医療学術連絡会 News Letter Vol.12 かけはし

- 発行日／2025年5月1日
- 発行／NPO法人「関西健康・医療学術連絡会」事務局
〒606-0001 京都市左京区岩倉大膳町422番地
公益財団法人 国立京都国際会館内659号室
TEL・FAX: 075-705-2496
URL: www.khma.jp E-mail: gaku-renrakukai@nifty.com
- 編集協力／前田 武、榎井 耕一郎